

解説 10 スタジオジブリ作品から日本の歴史を考えよう

【課題のねらい】

日本の歴史を学ぶための方法はたくさんあります。例えば歴史小説や学習マンガなどが、その代表的なものですが、最近ではゲームやアニメを入口に日本の歴史に興味を持ち始めたという学生も少なくありません。しかし、それらは大学で学ぶ「歴史学」という基準からすれば、必ずしも「史実」とは言えない要素も多分に含まれています。その一方で、スタジオジブリの映画は、比較的、学問的にも頷ける部分が多いので、日本の歴史を考えるには好適な素材です。そのような良質な素材を通じて日本の歴史を考えるきっかけを作れば、と考えて出題しました。

【解説】

1990年前後には、「学問の成果を芸術やビジネスにも生かしていこう」という“ニューアカデミズム”という社会的ブームがありました。宮崎駿監督も、その影響を強く受けており、ジブリ作品には、当時の日本中世史研究で流行していた“社会史”（「中世の人々の日常生活はどういうものであったか」）を追求する学問ジャンル）の成果が至るところに取り入れられています。

『もののけ姫』は、その最たるものですが、他にも『千と千尋の神隠し』などにも、社会史のエッセンスが認められます。『千と千尋の神隠し』には墮落した神々が登場しますが、それは、人間が神々を大切にしなくなった結果として墮落（＝荒廃）してしまった神々の姿です。そして、日本人の伝統的な認識においては、「神々」とは「自然」そのものの象徴でもあります。つまり、『千と千尋の神隠し』における「神々の墮落」とは、「自然の荒廃」を意味しており、戦後の日本人が神々や自然など「聖なるもの」への敬意を失ってしまったこと、有り体にいえば「自然破壊」や「環境破壊」に対する問題提起（アンチテーゼ）が込められているのです。

日本中世の人々は、自然に対し敬意を抱き、自然の主である神々に対し畏怖の念を抱いていましたので、自然環境を人工的に改変することに対し禁欲的でした。しかし、戦国時代から江戸時代、さらには明治・大正・昭和と歴史を経るにつれ、自然や神々に対する畏怖（尊敬と、その裏返しとしての恐怖）を人々は失っていき、遠慮なく自然環境を破壊し、開発を進めるようになりました。そのような日本人の自然（＝神々）に関する意識の変化に対して、常に警鐘を鳴らしてきたのが宮崎駿監督であり、スタジオジブリです。

そのようなジブリ作品の基調は『平成狸合戦ぽんぽこ』や『耳をすませば』などからも垣間見えます。大学生になったら、自由な時間も増えますので、そのような問題意識をもって、ジブリ作品を見返してみてください。